

『404-not found』

【登場人物】

- ・語り手……事件を語る謎の男
- ・若者……偶然を装い現れた青年
- ・ホステス……過去に男とトラブルを持つ女
- ・女……冷静な元教師。男に人生を壊された
- ・元刑務官……秩序を重んじる理知的な男
- ・死体の男……全員と因縁を持つ被害者

【あらすじ】

長野の山奥にひっそりと佇む、廃業した旧モーターカスケード。

そこに、互いに面識のない二人の男女が招かれる。

共通していたのは、彼ら全員が“ある男”——すでに死体となって横たわっていた男——と過去に深い因縁を持っていたことだった。

その場に現れる語り手は、事件の記録者である。

しかし語られる記憶は食い違い、死体の男の正体も、死因すらも次第に曖昧となっていく。

映像、録音、監視の目。過去と現在、真実と虚構。やがて明かされるのは、“告白”とは何か。

語る者は、誰か。見ているのは、誰か。そして——この物語は、誰のものか。記憶と真実、そして“見る者の責任”を問う心理サスペンス劇。

第一場…語りの部屋

暗転。かすかな雨音が聞こえる。やがて男の声が、静かに響く

語り手

最初に殺されたのは、誰だったか……。——いや、順番なんて、もうどうでもいいのかもしれませんが。ただ、あの夜、誰もが誰かを疑い、誰もが何かを隠していた。嘘と本当は、あんなにも簡単に、すり替わるものだった

沈黙。雨音が少し強まる。照明がゆつくりと中央に落ちる。男Ⅱ語り手が、無機質な椅子に腰かけている。目の前には録音機材、マイク、ノート、コーヒークップ

語り手

記録をとる。2025年11月3日、午後11時22分。場所は、長野県某所・廃業した旧モーター“カスケード”。……本件に関わる証言と記録を、私の記憶に基づいて再構成する。

語り手、ノートをめくり、少しだけ口元を歪める

語り手

“告白”という言葉には、ある種の都合が含まれている。真実を語る者は、自らの語りを“免罪”に使うとする。人間は、語ることで“裁かれること”から逃げられると、どこかで信じている。……私も、そうかもしれない

雨音が遠のき、代わりにわずかな“風の音”がスピーカーから流れる。語り手の目が遠くを見る

語り手

……昔、母が言ったことを、ふと思い出す。父のいない家で、母と二人、夕暮れを待っていた。外では雪が降り、暖炉が止まり、音のない空間だけが部屋に満ちていた。母は、壁のシミをじっと見つめながら、こう言ったんです。“人は忘れることで、生きていけるのよ”と。でも私は、忘れなかった。……いや、忘れたふりをして、生きてきた。……記憶というのは、不思議なもので……光と影のように、見たいものしか残らない。なのに、それが“自分のすべて”だと、思い込んでしまう

語り手、コーヒークップに口をつける。熱さに眉をひそめる

語り手

この部屋の空気も、あの夜の匂いも、いまだに指の隙間に残っている気がする。時間は過ぎたのに、ここには“あの夜”が、今も横たわっているようだ

語り手

場所の話しよう。この“モーター”——山の中腹にある、かつて観光バスが立ち寄った休憩施設。80年前に開業し、15年前に閉鎖。今はもう、誰も利用しない。誰も来ない。……“人を集める”には、ちょうどいい場所だった

語り手、マイクに近づく

語り手

そう、“彼ら”がここに集まったのは——偶然ではない。彼らは“来るように言われた”。ある者は、警察から。ある者は、知人から。ある者は、名前を知らない誰かから。それぞれに“もっともらしい理由”が添えられていた。避難。証言。依頼。保護。……あるいは、誘惑

静止。後方スクリーンに白黒の監視カメラ風映像が映る…ロビー、ドアの開閉、人物の影だけが映る

語り手

最初に集まったのは、五人。男が二人。女が二人。……そして、遺体がひとつ

映像が停止。スポットが落ちる。舞台上に箱馬と椅子。語り手はゆつくりと立ち上がる

語り手

ここで、注意していただきたい。この物語において、“遺体”はすでに存在している。誰が殺したかより、先に、“誰が最も嘘をついているか”を考えてくれ

語り手、舞台を歩く。箱馬の一つに手を置く

語り手

この場所に仕掛けられた痕跡。防犯カメラの配置。誰かが意図的に再生する“映像”、ある者の“録音データ”……物語は、真実を記録するために作られているのではなく、“誰かの物語として再構成される”ために存在している

スクリーンに一瞬だけフラッシュのような画像が映る。9人の影のような姿。誰が誰かわからない

語り手

ここにいた全員が、過去に“関係”していた。死んだ男と。あるいは、互いに。でも、その記憶の語り方は、すべて違う。誰かにとっては、あの男は“恋人”だった。別の誰かにとっては、“敵”だった。そして、ある者は……

語り手、突然動きを止める。沈黙

語り手

私自身も、今となつては、あの男が誰だったのか、本当に思い出せないことがある

長い沈黙。照明が少しずつ落ちる。語り手、机に戻る

ゆつくりと椅子に腰を下ろす

語り手

では、始めましょう。これが、あなたの知る“真実”になるかもしれません。

後方スクリーンに再び白黒映像。タイトルが浮かぶ：“CASE_00／

MOTEL_CONFESION,”

暗転

第二場…モーテルでの初対面

場面転換。モーテルのラウンジ。箱馬と椅子で構成された抽象的なセット。暖房のストーブが唸りをあげる。外は雪か雨。暗がり、人の男女が距離を取りながら佇んでいる。互いに視線を合わせようとしな

沈黙。ストーブの音が微かに響く

ホステス ……寒っ。なんなのよ、この場所。避難って話、マジ？

若者 俺も聞かされただけです。なんか“保護のため”って。……でも、こんな山奥って、ある？

元刑務官 俺は警察から連絡を受けた。かつて収容していた人物が事件に関わっている可能性がある……。“参考人として事情を聞かせてほしい”と。だが、現地集合とは妙だな。護送もなければ、案内もない

女 私も似たような話だったけど……“再調査のためのヒアリング”って聞かされて来たわ。でも、施設として完全に廃れてる。通電してるのが不思議なくらい

ホステス てか、あたし名前も名乗ってないんだけど。“モーテルに來い”って言われて来たら、あんたらがいた。……誰なの？あんたたち

一瞬沈黙

元刑務官 ……自己紹介をしようというのか？

若者 しとした方が、安心できません？ 誰がどんな立場でここにいるのか。俺はタケルです。職業は……特になくて、フリーター。今は、まあ、いろいろ放浪中です

ホステス 放浪？ それでこんなとこ来たの？

若者 たまたま拾われたんですよ。ヒッチハイクしたら、この近くまで乗せられて……“このモーテルに誰かがいる”って、そう言われて、来たんです

女 ……それ、誰に？

若者 名前も顔もよくわからないんです。黒い帽子かぶってて。声は低くて、落ち着いてた。……どこかで聞いたことあるような……

元刑務官 誘導された、というわけか

ホステス ……なんかもう、全部が変。誰も何も知らないふりして、でもどこか分かってるような顔して。……

女 そう感じるのは、たぶん……“ここに来る理由”がまだ言葉にできてないから。自分自身にも

沈黙。 ストーブの唸りが少し強くなる

ホステス 私は“ある人物の居場所を知ってる”ってメールが来たから来たのよ。

沈黙。 誰もが言葉を選びかけて、やめる

女 さっき、もうひとりいたわよね。……あの人、どこに？

若者 奥の部屋に入っていたと思います。……戻ってきてないけど

元刑務官 誰か、確認に行くべきだな

ホステス ちよつと待ってよ、みんな冷静すぎない？なんでこんなに“状況把握”できてんの？あたし、混乱してるんだけど！

沈黙。 ストーブの唸りだけが響く

元刑務官 この部屋、鍵は？

若者 え？……あ、閉まってました。最初から。俺、最初開けようとしたら、内側からガチャって

女 内側から？

元刑務官 つまり、“先に誰かがいた”ということか

ホステス それって……その人が鍵かけたってこと？

元刑務官 そういうことになる。俺たちが来る前から、この中には誰かいた。その人物が今もどこかにいるか——それとも、もう“いない”のか

ホステス

やっぱ変よ。避難所にしちや情報がなさすぎるし、警備もない。てか、こんな寒い日に山奥で集める？ 危機管理どうなってんの？ てか、なに、この“密室感”。これ、ほんとに現実？

女

……ねえ、“誰かに監視されてる”って思ったこと、ない？

若者

えっ……？

女

今も、どこかで“私たちを見てる誰か”がいる気がするの。こんなタイミングで、知らない者同士が集まって、共通点も曖昧。でも“偶然”じゃないような空気……その居心地の悪さ、気づいてない？

沈黙

照明が少し落ち、語り手の声が再び響く

語り手

——“集められた者たち”は、最初の違和感を見落とした。なぜこの場所だったのか。なぜ“彼”がいなかったのか。なぜ、誰一人、すぐに立ち去らなかったのか——すべては、そうなるように“設計”されていた

第三場…死体の発見と最初の告白

モーターのラウンジ。ストーブの音。全員がバラバラに座り、沈黙が続いている。突如、廊下の奥から慌てた足音が近づいてくる。若者が息を切らして入ってくる

若者 ちょっと……やばい。奥のバスルームで……誰か倒れてる……！

ホステス ……は？ ということ？

若者 浴槽のそばに……男。血が出た。……動いてない。……死んでると思う

元刑務官 案内しろ

元刑務官と若者が奥へ駆ける。残された女とホステス

ホステス ……マジかよ……ほんとに、死体ってこと？ 冗談じゃない……

女 落ち着いて。まだ確定じゃない。……でも、空気が変わった。さっきまでの不安とは別の、重さがある

ホステス 私、帰っていい？ 帰りたい。帰りたいって、思ってるのに、足が動かない。なんで？ 誰かが——この空間に、鍵をかけたみたい……

女 ……わかる。その感じ。“外に出る選択肢がない”って、なぜか思い込まされてる……

若者と元刑務官が戻ってくる。二人とも無言。空気が張り詰める

ホステス ……どうだったの？

沈黙

元刑務官 死亡している。頭部に強い損傷。血痕の量から見て、致命的だ。腐敗は進んでいない。……死後数時間以内だろう

若者 ……本当に……死んでた。あの人、さっきまで、生きてたかもしれないのに……

女 誰かが、この中の誰かが、殺したということ？

元刑務官

断定はできない。外部の犯行の可能性もゼロではない。だが……この密閉された空間で、出入りの痕跡もない以上、疑いは当然、我々に向かう

ホステス

ちょ、ちょっと待ってよ！？　なんで“私たち”が疑われるのよ！？

若者

落ち着いてください……

ホステス

ふざけんな！　あんたが最初に見つけたんでしょ！？　何か隠してんじやないの！？

若者

な、なんで俺が疑われなきゃいけないんですか！？

元刑務官

冷静になれ。今は、まず情報の整理だ。全員、ここに来た時間と、そのあとの行動を順に話すんだ。それができなければ、状況はさらに悪化する

沈黙。
ストーブの音だけ。女がゆつくりと立ち上がる

女

……なら、私から話すわ。私はこのモーターに、午後△時半に着いた。山道で少し迷ったけど、入口には誰もいなかった。ラウンジに入ると、あの死んだ男が一人でコーヒーを淹れていた。……目は合わせなかった。すぐに視線を逸らされた。それが最後。

全員、彼女の言葉に沈黙

若者

……あの人……誰だったんだ

女

……私は彼を、知ってる。……名前は、必要ない。私の人生を壊した男だった

女のモノローグに切り替える。照明が彼女の上だけ残る。他はやや暗転

女独白

教師をしていた。生徒の顔を一人一人覚えていた。学びの場は、いつも静かだった。

ある日、男が現れた。保護者として。だが彼は、こちらを一切見なかった。ある噂をばらまいた。ある生徒と“不適切な関係がある”と。

事実ではない。何一つ。でも“火のないところに煙は立たない”と言われ、私はやめさせられ、教師の道を断たれた。誰も私を守らなかった。あの時——私は、たったひとりだった

照明が戻る

ホステス ……つまり、殺した動機、あるってこと？

女 ……認める。憎しみは、確かにあった。でも、私は殺していない。ただ……もし、誰かが彼を殺したとしたら……私は、その人を……責めることはできない

若者 それ……自白ですか？

女 違う。“告白”よ。私の中の“正直”を、今、話してるだけ

元刑務官 ……興味深いのは、あなたが彼と“再会すること”を前提に来ていたという点だ。つまり、彼が“ここにいます”と、誰かに知らされていた？

女 メールだった。差出人不明。“カスケードに来い。あの男が現れる”とだけ。一度は削除しようとしたけど……私の手が、それを止めた。どうしても、“顔を見ておきたかった”。——生きているうちに

沈黙

ホステス ……なんなの、この場所。ねえ、私たち、“誰かに見られてる”気がしない？

若者 ……そう、かも。なんか、監視されてるっていうか……まるで最初から、“見せ物”にさせられている気がして……これ、なんですかね

元刑務官 映写機？なぜここに……いったい誰がこんなものを

映写機が隅に置かれている。突然起動し始める。

スクリーンに白黒映像…バスルーム。若者が“何か”を見下ろしている。音声はない

ホステス これ……誰が撮ったの……？

若者 ……俺じゃない……絶対に、俺じゃない……！

女 これは今の映像？

元刑務官 誰が、どのタイミングで何を見たのか——すべてが曖昧だ。だが、はっきりしているのは……“この場に嘘をついている者がいる”ということだ

沈黙。照明が落ちていく。最後に、語り手の声だけが響く

語り手声

——最初に嘘をついたのは、誰だったか。あるいは、最初から誰もが“嘘しか語っていなかった”のかもしれない

暗転

第四場…第二の告白と嘘の連鎖

モーターのラウンジ。照明はやや落ちており、ストーブの音がかすかに響く。登場人物たちはバラバラに配置され、目を合わせず、互いを警戒している。スクリーンには、さきほどの浴室の映像がループしている

ホステス ……これ、まだ流れてる。止めてくれない？

若者 ……無理です。リモコンも操作盤も見つからない。これ、たぶん自動で再生されてる。……誰かが設定したみたい

元刑務官 つまり、“この部屋で何が起きたか”を、見せようとしている者がいる。あの死体のことだけじゃない。我々の、表情や動きや言葉まで含めて、すべてが“記録”されているようだ

女 最初から、録画されてるってことね

沈黙

ホステス ……ねえ……あたしも、話していい？今さらって思うかもしれないけど……黙ってるのもしんどくて

若者 ……どうぞ

ホステス ……数年前、歌舞伎町のバーで働いてた。その頃、あの死んだ男が客として来たの。……最初は普通の客だった。スーツ着て、静かで、でも、そのうち酒癖が悪いつてわかって。暴れて、他の客に手を出して、……あたしにも

沈黙

ホステス 警察、呼んだ。でも、証言が食い違って、あたしの方が悪者になった。“誘惑した”とか“挑発した”とか、男の証言に信憑性があるって判断されてさ。店、辞めた。……あれ以来、夜の仕事からは完全に離れた

ホステス でも、あたしは、あの夜のことを忘れてなかった。忘れられるわけがない。……顔も、声も、全部、残ってる

元刑務官 その後、彼と接点は？

ホステス

ない。二度と会いたくなかった。……なのに、ある日、封筒が届いたの。差出人不明。中に、写真。あたしが殴られてる瞬間の写真だった。そして“会いたい人がいる”ってメモ。場所は、カスケード。……ここ

女

それは、脅迫？

ホステス

……わかんない。でも、引きずられた。過去の自分が、どこかに閉じ込められたままで、その写真が、それを引っ張り出してきた。……“会って、自分で決着をつけなきゃ”って思ったの。バカだよ

若者

……その時点で、彼がここに来るって、確信してたんですか？

ホステス

うん。“誰か”が、彼を連れてくるって思ってた。だって、私たちの共通点って、“あの人間と何かあった”ってことしかないでしょ？だから、ここにいる他の誰かが、きっと彼を呼び寄せたんだって、思ってた

元刑務官

だが、実際には——彼はすでに“死体”として、そこにいた

ホステス

……そう。“誰か”が、先にやった。その誰かが、今この中にいる。……そうじゃないの？

沈黙。

全員、誰も否定しない

ホステス独白

殺すって、どういうことだと思う？ 誰かの記憶を、誰かの声を、この世界から消すこと？

でもね、記憶って消えないのよ。消そうとしても、焼き跡みたいに残る。

あたしは、あの男の記憶を“殺したかった”。でも、それができないから——もしかして、誰かが代わりにやってくれたのかも、って。

怖いでしょ？ あたしの“願い”が、現実になったとしたら——それはもう、“共犯”なんじゃない？

沈黙

若者

……俺、言わなきゃいけないことがあります

ホステス

は？

若者

さつき“偶然拾われた”って言いましてけど……実は、最初から“このモーターの名前”を知ってました。誰に言われたかはわかりません。でも、電車の中で隣に座った男が、ぼつりと、“カスケード、知ってるか？”って。それだけ。でも、なぜか気になって。スマホで検索した。何も出てこなかった。……でも、それで頭の中に名前だけが残って、気づいたら、ヒッチハイクして、この場所を目指してた

女

それは……誘導された、ということ？

若者

……たぶん。自分の意思だったように見せかけて、でも、どこかで“導かれてた”。……そんな感覚が、ずっとある

元刑務官

君は、“彼”を知っていたのか？

若者

見覚えはなかった。でも……どこかで“知ってる気がする”って思った。……それは、会ったことがあるからじゃなくて、“語られた記憶”として、誰かから刷り込まれたのかもしれない。誰かが、俺に、“あの男を見せたかった”。……そんな気がするんです

沈黙

ホステス

……怖いのは、“自分の言葉すら、自分のものじゃない気がする”とこよね

女

私たちはもう……自分すら信じられない

元刑務官

……記録を残すべきだな。冷静に、客観的に。そうでなければ、このままでは、我々全員が、“ある種の幻覚”の中に取り込まれる

ホステス

あたし、あの夜のことを夢に見るの。暗い店内。割れたグラスの音。隣の客が目をそらして、ママが奥に引っ込んで——あたしの声だけが、誰にも届かないで、宙に浮いてた。誰も助けてくれなかった、って言うと、“証拠がなかったから”って、みんな言うのよ。でもさ——証拠あって、何？ 声の震えとか、手の匂いとか、言葉にならない何かが“あたしの中”には残ってたのに、外に出せないからって、“なかったこと”にされるの？ あたしはね……ずっと“あの時の自分”を、閉じ込めてたの。泣き叫んだら負けだって思ってた、平気なふりして、全部忘れたふりして、でも心の中じや、何千回も叫んだ。でね、もし……あたしの中の“あの日の声”が、誰かに届いてたとしたら。それを聞いた誰かが、“代わりに手を下した”としたら。それってもう、“罪”かな？ それとも……“正義”なのかな？

……ねえ、あなたなら、どう思う？

照明がゆつくりと落ちる

女

私は、教室が好きだった。子どもたちの声。チョークの音。黒板の匂い。整然とした秩序と、そこに少しだけ混じる“気まぐれ”が愛おしかった。だけどある日、それが崩れた。一枚の紙が、職員室の机に置かれていたの。匿名の告発。……“不適切な関係がある”と書かれていた。私は、何もしていない。でも、“何もしていない”ことは、証明できないのね。疑いが一度つけば、それだけで十分だった。生徒の目が変わった。保護者の空気が変わった。あの教室が、あつという間に“檻”になった。私は、沈黙した。反論は、言い訳に聞こえるから。怒りは、攻撃に見えるから。悲しみは、弱さに見えるから。……だから私は、黙った。でも、言葉を閉じたのは私自身だった。本当は、叫びたかった。“私は、何もしていない”って。“私は、ここにいる”って。それでも、私はまだ自分を守っている。今ここでさえ——“私は殺していない”と言いながら、心のどこかで、“誰かが殺してくれたのかもしれない”と思っている。……そう思った時点で、私はもう、“罪人”なのかもしれない。

静かに座り直す。照明が落ちていく

若者

ときどき、思うんです。自分の記憶が“誰かのもの”だったら、どうしようって。この風景、歩いた気がする。この声、聞いた気がする。でも、“気がする”だけで、ほんとは全部——借りものだったら。自分の人生って、いつから自分のものだったんだろう。子どもころの記憶が、どうしても曖昧で……ある日、親に聞いたんです。“俺って、いつからいた？”って。笑われたけど、笑えなかった。俺、ここに来る前に、何してたっけ。誰かに呼ばれた気がする。でも顔は思い出せない。名前も、手の匂いも、服の色も。なのに——その声だけは、頭の中に残ってるんです。“お前は見届ける側だ”って。見届ける？俺は、ただ“見てるだけ”でいいのか？誰かが叫んで、誰かが黙って、誰かが血を流してるのに——俺は、ただの“記録係”か？……それって、ほんとに無罪なんだろうか。ねえ……“何もしなかった人間”って、一番最初に裁かれるべきじゃない？

照明が落ちる。静寂

※照明は白熱灯のように暖かいが、周囲の舞台はすでに歪んで見えるような配置。彼は直立し、胸元で手を組む

元刑務官

……私はずっと、“ルール”の側にいた。手順があり、規律があり、順番がある。だから、どんな不条理も“時間が解決する”と、どこかで信じて

いた。ある死刑囚がいた。彼は無実を訴え続けていた。証拠は曖昧で、供述も二転三転していた。でも“確定判決”が出た以上、我々には、従うしかなかった。いや、“しかなかった”という言葉は、卑怯だな。私は、それに“従うことを選んだ”。間違っていた可能性を、棚に上げた。誰かが決めた“正義”を、自分の責任にしたくなかった。……そうすれば、眠れると思っていた。その男が、最後にこう言った。「人を裁く制度は、人を守る制度じゃない」私はその言葉を、笑ったんだ。“制度を信じられなきゃ、世界は壊れる”と、そう思ったから。でも——壊れていたのは、世界じゃなくて、私の“良心のほう”だったのかもしれない。……見なかったことにするのは、簡単だ。“知らなかった”と言えば、責任は逃れられる。だが、私にはもう、言えない。“知らなかった”と。“気づかなかった”と。

しばしの沈黙。照明が消える

語り手の声が入る

語り手

——人は、自分が“正気”であることを信じるために、他者の“狂気”を必要とする。他人が間違っていれば、自分は正しいと信じられる。それが“告白”の構造だ。語りながら、裁きから逃れようとする——真実ではなく、“救済”のために、語るのだ

語り手の声が消える。照明がゆっくり落ちていく。モニターに、再び浴室の静止映像。誰かがこちらを見ている

暗転

第五場…過去の映像と真相の捻れ

暗転。やがて、白黒の映像がスクリーンに映し出される。映像には浴室。誰かの背中。その人物が浴槽を覗き込んでいる。顔は見えない

映像のなかの人物が、ゆっくりと振り向く。スクリーンに、若者の顔。無表情

その顔が、一瞬だけ“笑み”を浮かべる。直後、照明が明転。現実のラウンジ。若者がスクリーンを凝視している

若者 ……違う……それ、違います。俺じゃない……俺は、あんな顔……してない……！

ホステス 映像の中のアなた、笑ってたよ。あれはどう見ても“見つけた顔”じゃない。“仕留めた顔”だった

若者 そんな……俺、記憶にない……俺……

女 記憶は操作できる。見たいものを見て、都合の悪いものは塗りつぶす。誰だっけそう。……だから、証拠が必要になる。でもその証拠すら、“誰がどう使うか”で意味が変わるのよ

元刑務官 映像の出どころが問題だ。誰が、どこから、何の目的で、それを流しているのか。君がそこに“映っていた”という事実よりも、“なぜ映されていたか”のほうが重大だ

若者 ……おかしい……なんで……こんな映像が残ってる？ 誰が撮った？ それ以前に——俺、そこにいたっけ？ 本当に？

ホステス 自分でいたって言ったじゃん

若者 ……覚えてる。でも、“その時の映像”として見ると、違うんだ。“その自分”が、自分じゃない気がしてくる

女 “記録”が“自分”を裏切る瞬間ね

元刑務官 我々は皆、“語ったこと”よりも“映されたこと”で判断される。それは恐ろしいが、逃げられない構造だ

スクリーンに別の映像。語り手が椅子に座り、こちらを向いて語りかけている。音声はなく、無音の中で口元だけが動いている

ホステス ……なに、これ

元刑務官 ……これは、いつの映像だ？

女 今じゃない……でも、“今”にも見える……どういうこと？

語り手の映像が止まる。切り替わって、白い部屋。そこに“あの男”——死体の男——が座っている。生きている。笑っている

女 ……嘘……

若者 ……あれ、死んだはずじゃ……？

スクリーンに、一瞬だけ別の“若者の記憶”が割り込む…自分が窓の外からこのモーターを見下ろしている映像。まるで自分が“観察者”だったかのよう

若者小聲 俺……あの視点、見覚えある……。でも……なんで……？

スクリーンに再び語り手の顔。今度は音声あり

語り手映像人は、証拠によって事実を確かめようとする。だが、映像も音声も、すべては“編集された記憶”にすぎない。あなたが信じたものは、“私が見せたかったもの”かもしれない。それでも、あなたは真実を選ぶつもりか？

スクリーン消える。現実のラウンジ。全員、沈黙している

ホステス もう、なにが本当か、わかんない。誰かが死んだことも、本当に死んでるのかも、わかんない。私たちが今ここにすることすら……あの男は誰なのかも

元刑務官 ひとつだけ確かなのは、“選ばれた”ということだ。ここに集められ、過去を暴かれ、告白させられた。その意図が、ただの偶然であるとは思えない

語り手、舞台奥の暗がりにも再び登場。机の前に座る。録音機材を操作している

語り手 “偶然”という言葉ほど、よくできた偽装はない。人はそれを信じることで、自分の物語に意味を与える。だが、もし偶然がすべて仕組まれていたとしたら？君たちは今、どこにいる？——モーターの中？それとも、“ある男の告白”の中？

登場人物たちが動きを止める。スクリーンに、若者・ホステス・女・元刑務官、それぞれの“異なる視点からの回想映像”が次々に映る

- 若者の記憶では、死体はなかった
- ホステスの記憶では、死体は自分を睨んでいた
- 女の記憶では、死体は自分の姿をしていた
- 元刑務官の記憶では、死体は語り手だった

映像がフラッシュのように切り替わり続ける。照明が点滅。やがて暗転

語り手声のみあなたの記憶は、編集されていませんか？この“事件”の中で、最も曖昧なもの——それは、あなた自身の目に映った“過去”かもしれないのです

完全暗転

第六場…真相の提示、あるいはさらなる謎

暗転。風の音。やがて、ぼんやりとしたスポットライトが語り手の机を照らす。机の上には録音機材、ノート、コーヒーマグのカップ。語り手がゆつくりと座っている。

語り手

記録を終える前に、最後に確認しておきましょう。あなたが今見たものは、“出来事”ではなく、“記憶”です。誰かの記憶。あるいは、あなた自身。では、その記憶が真実だったかどうか——どうやって確かめますか？

語り手、ノートを開く。そこには乱雑なメモと、登場人物たちの名前が書き殴られている。

語り手

若者——タケル。彼は“偶然”という形でここに現れた。だが、偶然ほど巧妙な意図はない。ホステス——名前不詳。彼女は写真を送られ、過去の暴力を思い出させられた。“あの男”への怒りは本物だったが、果たして“写真”が本物だったかは、誰も確かめていない。元刑務官——明確な論理と冷静さ。だが彼はかつて、冤罪事件に関わっていたと記録にある。

“真実の見極め”に失敗した経験を持つ者の目は、信じられるのか？

語り手、手帳を閉じ、立ち上がる

語り手

……そう。“真実”という言葉ほど、都合の良いものはない。人は、それを他者に求めながら、自分自身には“物語”を許してしまう。“私はこうだった”“私は被害者だ”——その言葉の裏に、どれほどの歪みが隠されているだろうか

舞台がゆつくりと照らされ、再びモーターのラウンジ。そこに登場人物たちが配置される。皆、一言も発しない。中央には“死体”が横たわっている。だが顔は見えない

語り手

……では、ここで、事実を明かしましょう。“あの男”の正体。彼の名前は——いや、それも、もう関係ないのかもしれない

語り手、ゆつくりと死体に近づき、その顔を覗き込む。しばしの沈黙

語り手

……この顔を、私は知っている。この顔は……私だ

登場人物たちが一斉に語り手の方を向く。同時に、スクリーンに過去の映像。“語り手自身”が、浴室で横たわっている死体を見下ろしている。だがその語り手の顔も、カメラの外にあつて見えない

若者 ……それ、どういう……

女 ……あなたが死んでるなら、誰が今、話してるの？

ホステス 待つて……あたし、前にこの光景、見た気がする……夢？ 違う、なんかもつと……

元刑務官 記憶の構造に似ている。同じ映像を何度も見ているうちに、何が初めて、何が終わりか、わからなくなる

語り手 そう。私は語っているが、同時に、観られている。この“物語”を記録している誰かがいて、その“誰か”もまた、嘘をついている可能性がある

スクリーンに、現在の舞台の俯瞰映像。そこに新たな“語り手”が映っている。照明と同じ動きをしているが、わずかにタイムラグがある

女 ……もう一人いる

ホステス いや、もう“何人目”かわかんない……語ってる“私”と、演じてる“私”と、見てる“私”が……全部違う気がする……！

若者 じゃあ、これは“誰の物語”なんだ……！？

スクリーンが切り替わる。“証言映像”と称した複数のカメラ映像が同時再生される。≠分割された画面に、それぞれの登場人物がモノローグを語っている

若者の映像 僕は見ていない。見たふりをした。恐怖を演じたただけだ

ホステスの映像 私が手をかけた。けど、それは正当だった。彼が私を壊したんだから

女の映像 私はそばにいた。でも……殺したのは私じゃない。私じゃないと信じたいだけかも

元刑務官の映像 私は止めようとした。だが結果的に、私は——目を背けた

スクリーンがフェードアウト

語り手 誰もが“本当のこと”を語っていない。なぜなら、“本当のこと”は、すでに“語れないもの”になっているからだ。だから、人は“告白”する。

“真実”ではなく、“許されたい”から

語り手、録音機材のスイッチを切る

語り手

——告白は、まだ終わっていない。それは、あなたの中で、これから始まるのかもしれない

登場人物たちが、全員こちらを見る。やがて、ゆっくりと歩き出し、舞台袖へと一人ずつ消えていく

最後に残った語り手が観客席に目を向けて、微笑む

暗転

スクリーンに一文が浮かび上がる

この記録は、関係者によって提出されたものであり、内容の真偽は確認されていない

完全暗転

(終)